



# 短歌の味わい

穂村 弘  
ほむらひろし

## 目標

- 情景や心情を表す言葉に注意して読む。
- 作品に描かれた固有の情景や心情のもつ意味を考える。

白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まらずただよふ

若山 牧水  
わかやまぼくすい

「白鳥はかなしからずや」と、いきなり不思議な思いが投げかけられる。「え、どうして？」と問う間もなく、空の青にも海の青にも染まることなく漂っているから、という意外な理由が記される。ずっと純白であることの哀しみ。だが、現実の鳥がそんなことを考えるはずがない。海辺にいた「白鳥」とは鷗だろうか。二十代の作者は、その白い鳥の姿に自らを重ねているようだ。そして、読者もまた、若ければ若いほど、孤独であれば孤独であるほど、その感覚に共鳴できるのではないか。もしも、その身が青に染まることのできたら、空と、海と、世界と一

## 短歌のぎまり

短歌とは、五・七・五・七・七という五句三十一音からなる短詩型文学。一首、二首と数える。

前半の三句を上(う)の句、後半の二句を下(した)の句という。通常、百人一首カルタの取り札には、下の句が書いてある。

また、一首の中で、言葉のつながりの切れめや意味の切れめにあたるところを句切れという。読むときにはいったん休止するとよい。

ただし、句切れを必ず

つになれるのに。でも、それは不可能だ。だって、白い鳥は死ぬまで白い鳥だから。永遠の憧れを胸に秘めたまま、今日も真つ青な空を海を漂っている。

濁流だくりゅうだ濁流だだと叫び流れゆく末は泥土ていどか夜明けか知らぬ

斎藤さいとう史ふみ

5

斎藤史は新鮮な青春歌とともに出発した。だが、この華やかな才能に対して、時代の運命は容赦ようしやがなかった。一九三六年の二・二六事件で反乱軍を援助えんじよしたとして父である斎藤瀏りゅうが罪に問われ、幼なじみの軍人たちも処刑しよけいされた。そして、昭和という時計の針は戦争に向かつて進んでゆく。この歌は、そのような時代の激動を「濁流」、すなわち濁にごった水の激しい流れに託たくしてうたっている。「だくりゅうだだくりゅうだ」という「だ」の音の繰り返しが異様な迫力を感じさせる。加えて、その流れの果てに迎える、まだ誰にもわからない未来の運命を、「泥土」か「夜明け」かという二者択たくいつ一の形で示したことが衝撃しよげきを生んだ。「末は泥土か夜明けか知らぬ」を音読すると、「でいど」の濁った音と「よあけ」の澄んだ音が印象的。「泥土」の暗さに対する「夜明け」の明るさという意味の違いだけではなく、音の響きの面からも対照的な表現となっている。

15

10

しも限定できない歌もあり、歌の解釈によって句切れは変わることがある。

## 二・二六事件

一九三六年二月二十六日、陸軍の青年将校らが政治改革を目ざし、約千四百人の兵士を率いて起こしたクーデター。大臣たちを殺傷し、東京の中心部を占拠せんきよするなどした。まもなく軍によって鎮圧されたが、事件後、軍部は政治への発言力を強めていった。

観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生

栗木京子

乗客は入れ替わっても、観覧車は同じ場所です。いつまでも回り続けている。その中には無数の人々の思い出が眠っている。「回れよ回れ」という呼びかけは、過ぎ去った時を甦らせる呪文なのかもしれない。あの日、観覧車のゴンドラの中で向かい合っていたあなたと私。二人だけで地上を離れて、ゆっくりと天に昇っていった。けれども、その時間は永遠ではない。やがて観覧車は地上に戻り、二人は束の間の夢から覚めて、それぞれの人生を歩み出す。あなたにとってそれはたった一日のことで、過ぎないだろう。けれども、私の胸には一生の思い出として刻まれている。「一日」を「ひとひ」、「一生」を「ひとよ」と読ませることで、「君には一日我には一生」が鮮やかな対句表現になっている。繰り返しのリズムの中に描かれた二つの時間の対比が切ない。

春のプール夏のプール秋のプール冬のプールに星が降るなり

穂村弘

思い返せば、プールの記憶はいつも真夏のものだ。水飛沫、歓声、プールサイドの灼けたコ

(166 ページ)

若山牧水

一八八五—一九二八

宮崎県に生まれた。歌集

に『別離』『路上』『山桜

の歌』などがある。

(167 ページ)

斎藤史

一九〇九—二〇〇二

東京都に生まれた。歌集

に『魚歌』『秋天瑠璃』な

どがある。

栗木京子

一九五四—

愛知県に生まれた。歌集

に『水惑星』『万葉の月』

などがある。



穂村 弘 [一九六二—]

北海道に生まれた。歌人。

歌集に『シンジケート』『手紙魔まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)』『水中翼船炎上中』、短歌入門書に『はじめての短歌』ほか、詩集、エッセイ集、絵本、翻訳など著書多数。

《出典》本書のために書きおろしたものである。



ンクリートの熱さ。頭上にはいつでも太陽が燃えていた。夏休みの絵日記にもそんな絵を描いた。でも、この歌のプールは違う。たった一行の言葉の中で春夏秋冬が過ぎ去っている。しかも、その背景はずっと夜。だから、ここには全く人間の気配がない。私は人間なのに、いや、だからこそ、無人の世界に美しさを感じることもある。本当は夏以外の季節にも、真夜中にも、人間が誰も入っていないときにも、プールはちゃんとそこにある。季節外れのプールには、桜の花びらが散っていたり、枯れ葉が積もっていたり、氷が張っていたり……、あんまり綺麗な印象がない。けれども、人々がその存在をすっかり忘れている夜、そんなプールに無数の星たちの光が降りそそぐ。もしかしたら、この歌の舞台は遙かな未来の地球なのかもしれない。

# 短歌十首

くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

正岡子規

ああ皐月仏蘭西の野は火の色す君も雛罌粟われも雛罌粟

与謝野晶子

みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる

斎藤茂吉

不來方のお城の草に寝ころびて

空に吸はれし

十五の心

石川啄木

日本脱出したし 皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも

塚本邦雄

## 正岡子規

一八六七—一九〇二

愛媛県に生まれた。歌集に『竹乃里歌』がある。

## 与謝野晶子

一八七八—一九四二

大阪府に生まれた。歌集に『みだれ髪』『舞姫』などがある。

## 斎藤茂吉

一八八二—一九五三

山形県に生まれた。歌集に『赤光』『あらたま』『白き山』などがある。

## 石川啄木

一八八六—一九二二

岩手県に生まれた。歌集に『一握の砂』『悲しき玩具』がある。

## 塚本邦雄

一九二〇—二〇〇五

滋賀県に生まれた。歌集に『日本人霊歌』『詩歌變』などがある。

海を知らぬ少女の前に麦藁帽むぎわらぼうのわれは両手をひろげていたり

寺山修司てらやましゅうじ

俺おれは帰るぞ俺あしたの明日へ 黄金の疲れに眠る友よおやすみ

佐佐木幸綱ささきゆきつな

自転車のカゴからわんとはみ出してなにか嬉しいセロリの葉っぱ

俵万智たわらまち

おねがいねって渡されているこの鍵かぎをわたしは失くしてしまふ気がする

東直子ひがしなおこ

もう二度とこんなに多くのダンボールを切ることはない最後の文化祭

小島なおこじまなお

## 千みちしるべ

1 印象に残った歌を選び、その理由について考えたことを伝え合おう。

2 鑑賞文や次ページのコラムを読んで、選んだ歌の魅力を文章にまとめたり、短歌を創作したりしよう。

### 寺山修司

一九三五—一九八三

青森県に生まれた。歌集に『田園に死す』などがある。

### 佐佐木幸綱

一九三八—

東京都に生まれた。歌誌『心の花』を編集する。歌集に『群黎』などがある。

### 俵万智

一九六二—

大阪府に生まれた。歌集に『サラダ記念日』などがある。

### 東直子

一九六三—

広島県に生まれた。歌集に『春原さんのリコーダー』などがある。

### 小島なお

一九八六—

東京都に生まれた。歌集に『乱反射』などがある。

少しだけ変えてみる

穂村 弘

「すごい人」言ってるわたしもそのひとり。金曜夜の渋谷しゅぶやに立った

この短歌を読んで、ああ、この感じわかる、と思いました。金曜の夜の渋谷ってめちゃくちゃ混雑していて、本当に「すごい人」だもんなあ。だから、「そのとおりですね、歩きにくいよね。」と同感はできる。でも、それ以上の共感はできませんでした。だから、ここから少しだけ歌を変えてみます。

「すごい人」言ってるわたしもそのひとり。金曜夜の渋谷しゅぶやになった  
下目黒しもめぐろりんご

「渋谷に立った」から「渋谷になった」へ。一文字違うだけなのに、どこか印象が変化しています。こうすると、「渋谷」が単なる町の名前ではなく、「わたし」やあなたが集まって作り出した何かに思えてくる。例えば、それは金曜の

夜だけに生まれる巨大な生き物。その中には、すごい数の人々が細胞のように溶け込んで蠢うごめいている。次の瞬間、何が起ころうとも不思議ではない。「わたし」もその中の一人なんだ。そんな「金曜夜の渋谷」のどきどきするような感覚が伝わってきます。

実は、冒頭ぼうとうの短歌は下目黒りんごさんの原作を私がわざと改悪したものでした。以下も同様です。例えば、こんな歌はどうでしょう。

もう一度触れてください 改札で女の声に呼びとめられる  
駅の改札でICカードのタッチが不十分だったのでしよう。  
「もう一度触れてください」と自動音声による「女の声」に呼び止められてしまった。そんな日常の光景です。「ありますね、こういうこと。」としか言えませんが。ここから少しだけ変えてみます。

もう一度触れてください 改札で声の女に呼びとめられる

ほんた  
本多 真弓まゆみ

「女の声」から「声の女」へ……。すると日常の光景が、突然、不思議な別世界に変わってしまいました。その世界には声だけの女が存在しています。「もう一度触れてください」という言葉もICカードのタッチではなく、もう一度私に触れてください、という意味にも思えてきます。でも、声だけでは、彼女がどこにいるのかわからない。触れたくても触れられない。悲しいすれちがいが、まほうしこい幻の恋の運命が、そこに浮かび上がります。もしかすると、「声の女」とは前世の恋人だったのかもしれない。

停車場の人ごみの中に

ふと聴ききし

わがふるさとの訛なまりなつかし

都会の駅の人混みの中でふと耳にした言葉に、〈私〉ははっとしています。それは自分のふるさとの訛でした。ああ、なつかしいなあ。そんな体験は、多くの人にありそうです。ただ、近代の歌人、石川啄木は、このようには表現せずに、ひと味違う歌を生み出しました。

ふるさとの訛なつかし

停車場の人ごみの中に

そを聴ききにゆく

石川啄木

ここでは〈私〉は、わざわざ駅の人混みの中に出かけてゆくのですね。なつかしいふるさとの訛を聴ききにいくために。そんなことをする人がいるのでしょうか。なんだかおかげさにも感じられます。でも、だからこそ、この歌は百年以上の時を超えて、人々の記憶に長く残ったのでしょう。前の歌と比べてみると、ふるさとの訛がなつかしいという気持ちは同じ、使われている単語もほとんど同じ、ただ違うのは言葉の並べ方という順番だけです。でも、それによって、ふるさとへの思いがより強く印象づけられる一首になっています。

